

劇場と大学（教員養成学部）との新たな関係づくり ～いわき芸術文化交流館アリオスと宮崎大学の実践～

高橋 るみ子（宮崎大学）
児玉 孝文（んまつーポス）

本研究では、大学の専門的な教育力を効果的に導入したアウトリーチ活動（おでかけアリオス「んまつーポス身体表現ワークショップ」）について紹介し、地方大学と教員養成という二つの観点から、大学と劇場等の連携・協力について考察する。

1. おでかけアリオス

広大ないわき市の隅々にアートの魅力を伝えたい。いわき芸術文化交流館アリオス（以下、アリオス）のコミュニティー・プログラム「おでかけアリオス」は、2007年の開始から現在まで、予定も含めて95のプログラムを197の学校に届けてきた。震災後は、クラシック音楽中心のメニューにダンスワークショップ（伊藤千枝「珍しいキノコ舞踊団」）をはじめ、「震災等による大きな不安やストレスを感じている子どもたち、そして被災した市民の心が少しでも和らいだり、感性の豊かさを取り戻したりする一助となるようなプログラム」を届けている。

2. 新しい出会いを生み出す回路を持つ「んまつーポス」

「おでかけアリオス」がダンスワークショップの二番手に人選した「んまつーポス」は、体育で取り扱うダンス（表現体育）に拘り続けてきたコンテンポラリー・ダンスユニットである。彼らは、横浜ダンスコレクションやソウル国際振付フェスティバルのファイナリストに選出されるなど、宮崎を拠点に国内外で活動する一方、文化庁事業等の派遣芸術家として、学校でワークショップ型の授業を実施している（小学校13校、中学校6校、高校1校）。また、宮崎大学の舞踊学研究室が立ち上げたアートNPO法人の中心メンバーとして、体育では難しい「鑑賞」の体験を子どもたちに提供する「コンテンポラリー・ダンス鑑賞教室」を開催している（開催校30校）。

3. おでかけアリオス「んまつーポス身体表現ワークショップ」（以下、んまつーポスWS）

「んまつーポスWS」は、高橋がダンスならではの復興支援について打診したことを契機に、大学との協働を模索するアリオスが実験的に取り組むプログラムである。今年度の実施回数は6回（6～10月）、開催校はいわき市立小白井小学校・中学校（児童生徒数7名）。毎回2時間、子どもたちと教員にアリオスのスタッフも加わり、学校のあらゆる空間を舞台に表現活動を実施する。また、最終回となる第6回は、地域で活動の成果（作品）を上演する。

できるだけ長い時間を、お金をかけずに、んまつーポスと小白井の子どもたち、そしてアリオスのスタッフが楽しく過ごすプログラムである。

4. 劇場と大学の連携・協力の実際

前章で述べたように、「んまつーポスWS」は、「おでかけアリオス」が大学とはじめて協働するプログラムであり、子どもたちの身体の健やかさ・豊かさを育むために、これまでは縁のなかった「体育」に位置づけて実施するプログラムである。

それに対し、大学は、極小規模校・小中一貫校の開催校にふさわしい教材を開発する、授業アドバイザーとして授業づくりにかかわる、WSに必須な「ふりかえり」（非日常の単発の体験としてではなく、日常との連続性の中に位置づけるような活動）を企画するなどで協力した。ただし、これらの協力は、アリオスのスタッフが宮崎大学を訪問する、大学が企画・実施した意見交換会（横浜市）にスタッフが参加する、事前に大学と担当教員とが共通理解するための場（於：実施校）を設定するなど、丁寧な関係づくりを重視してきたアリオスのサポートがなければできなかったものである。

5. 実践を通して見えてきたこと

今般の劇場法において、劇場等の職員の資質の向上を図るような大学との連携・協力の推進が示されたが、地方では、必ずしも劇場の必要と合致する教育力を有する大学があるとは限らない。アリオスの場合は、遠く宮崎大学に必要とする教育力があつたということである。けれども『文化からの復興』（水曜社）が出版されていなければ、宮崎大学は、アリオスが何を必要とし何を大学に期待しているかを知る術はなかった。同じく、高橋らがアピールをしなければ、人材も含めて宮崎大学がどのような教育力を有しているかをアリオスが知ることにはなかった。劇場等が期待する教育力と大学の教育力を公開・調整する全国的なネットワークの構築が急がれる。

同じく、劇場法に学校教育との連携が示されたが、アウトリーチ活動を通して子どもの発想力やコミュニケーション能力の育成等を図るには、劇場等と協働する力をもつ教員の養成が不可欠となる。今回は、各回の活動をA1サイズのポスターにまとめ、いわき市の全小学校に配布する活動（「ふりかえり」の部分）を学生に任せ、教員を目指す学生の協働する力を培う場とした。教員養成を行う大学は、劇場等との連携・協力を前提とした新たな組織を考える時である。

現在、宮崎大学では、教育協働開発センターが中心となり、芸術教科の教員や地域の教育委員会、県立芸術劇場やアートNPO法人等を巻き込んだ組織づくりが進行中である。またアリオスも、「んまつーポス」の続投や教員のための実技研修会を検討している。

芸術家が考案したダンスフラッシュモブを学校体育に～芸術家と子どもと教師とで拓く表現の世界～

豊福彬文（宮崎大学大学院教育学研究科院生）
野邊壮平（NPO 法人 MIYAZAKI C-DANCE CENTER）

1. はじめに

これまで学校の授業で教えてきた基礎的な内容を家で学び、家で取り組んできた応用課題を学校で学ぶ「反転授業(flipped classroom)」が、ICT技術の進展で可能になった。我が国でも全国に先駆けて佐賀県武雄市が、まずは理科と算数の一部単元を選び実証実験を重ねながら、順次全教科で試みるという。

この反転授業において、子どもたちが自宅で予習に使用する動画は、教師自らが撮影しても、教材映像専用のサーバーから選んでもよい。実際の授業では、予習のチェックをした上で、子どもたちは自宅で学習してきたことを話し合ったり、分からなかったところを解決したりする。この反転授業に対して、情報学の専門家は、「近代の学校の基本である一斉授業のスタイルを ICT を用いて変えるものだ。10 年後の教室では本命になり得る」と述べ、「自宅で予習する教材をどう充実させるか」という課題を示している。

本研究は、10 年後にダンス学習も反転授業が本命になることを想定し、子どもたちが自宅で予習する教材（動画）とその充実について提案する。

2. 芸術家が考案したダンスフラッシュモブ

フラッシュモブ（一瞬の群集）とは「交流サイト(SNS)やメールを通じて集まった人々が街中で突如一斉にパフォーマンスを行い、すぐに散会する」ものである。フラッシュモブによっては難しいテクニックを使用するものもある。

そこで、子どもたちが自宅で予習する教材の候補として、豊福らが着眼した動画が、youtubeなどで手軽に視聴できる芸術家が考案したダンスフラッシュモブである。

日本でも、国際舞台芸術祭「フェスティバル／トーキョー (F/T)」が、井手茂太氏、白神ももこ氏、KENTARO!!氏等の芸術家を企画者としたダンスフラッシュモブ (F/T モブ) を実施している。この「F/T モブ」の特徴は、①集団でのコミュニケーション、②参加型プログラム、③既存のダンススタイルに捉われない自由な発想、④日常の身振りを生かしたオリジナリティ溢れる振付手法、そして短い（一分ないし二分）ことである。

そこで、豊福らは、この「F/T モブ」＝ダイナミックなコミュニケーションの場の創出が目的で、

芸術家が考案したダンスフラッシュモブの動画を、児童生徒が自宅で予習に使用する教材とし、ダンス学習の模擬反転授業を試みた。

なお、模擬授業は、職業（振付家・ダンサーサー）を有する大学院生である豊福と野邊が取り組む実践研究「芸術家と子どもと教師とで拓く表現の世界」の一環として実施した。

3. 「F/T モブ」を活用したダンスの授業

宮崎市立大宮中学校の第 3 学年の選択ダンス（男女）において、「F/T モブ」の動画を教材に、3 時間のワークショップ型授業を実施した。授業内容は、①基礎的な知識を身につける活動（井手氏及び白神氏が考案したダンスフラッシュモブをみんなで踊って楽しむ）②応用課題に取り組む活動（芸術家が考案したダンスフラッシュモブの面白さについて話し合い、グループ毎にオリジナルを創作する）③振り返り（各グループが創作したダンスフラッシュモブを見せ合い、みんなで踊る）で構成した。

事後に課した自由記述の感想文では、「思わず体を動かしたくなるようなものばかりでした。」「身近な動きをダンスに変えることができるという発見がありました。」「家で練習して、やっと一通り踊ることができました。」等、芸術家が考案したダンスフラッシュモブ及びその動画を活用した授業が、学習者に肯定的に受け入れられたことが明らかになった。

また、授業を参与観察した舞踊教育の専門家は、「芸術家が考案したダンスフラッシュモブと予習のための動画は、これまでの学校ダンスの授業風景を大胆・芸術的に変容させることができるだろうが、「著作権フリーの動画の充実」が今後の課題であると述べている。

4. おわりに

井手氏が考案した「F/T モブ」の教材化について、本人にインタビュー（書面）をしたところ「振付の権利の問題もあるので快諾はできないがモブの一例としてお見せいただく分には問題ない」という回答を得た。井手氏が指摘するように、芸術家には教材化を前提とした動画創作の依頼が必要だということが分かった。

今後は、教材化が前提のものを「ダンス学校モブ」と呼び、学校やダンス教育に興味・関心を持つ芸術家に呼びかけ、子どもたちの予習のための動画として集めていきたい。このことが「著作権フリーの動画の充実」を図る方法であり、「芸術家と子どもと教師とで拓く表現の世界」の一つの方法である。

1. 研究対象と研究方法

近年、芸術のあり方が、芸術のための芸術から、社会のための芸術へとシフトし、社会の諸問題を解決するツールとしての芸術の活用法が探求されはじめている。これは芸術の創造性という特性が、社会や個人に別の視点をもたらし、新たな自己の発見と他者との関係性の変化を促すことが可能になるからである。誰もが創造的な活動に参加しうるコミュニティダンスという分野は、そうした芸術活用の一例と考えられる。

本研究は、2013年8月、米国ニューヨーク州のシャトーカにおいて5日間にわたって行われた **Encore creativity for older adults**(以下 **Encore** と略記す) という高齢者を対象とした芸術プログラムの中でも、特にコミュニティダンスに関わる部分にフォーカスし、それを研究の対象としている。筆者の参与観察記録と関係者(ワークショップの主催者、ファシリテーター、参加者)へのインタビューを中心に、高齢者を対象としたコミュニティダンス(の手法)が実施される社会的意義とこの実践が参加者に及ぼす効果について分析・考察する。

2. Encoreにおけるコミュニティダンス

Encore とは、高齢者(55歳以上)を対象に、プロのアーティストの指導のもとで行う市民のコーラス活動である。しかし、その目的は高齢者の生き甲斐の創成、そして、彼らの社会参加を推進・支援するものことにあり、ワシントンD.C.を中心にアメリカ東海岸地域に広く居住する高齢者が参加している。この芸術プログラムは、高齢者たちの身体的・精神的・社会的な状況を改善する可能性があるとして、老人学の分野でも注目されている。本研究の対象であるシャトーカでのサマープログラム(年に一回開催)は、**Encore**の特別事業であり、そこではコーラスだけではなく、演劇とダンスを加えたより創造的な芸術プログラムに取り組んでいる。

ダンス部門のファシリテーターとして招かれたのは、アメリカで30年以上にわたってコミュニティのためのダンスを展開してきたダンス・エクスチェンジというダンスカンパニーのメンバーである。

3. 高齢者のためのコミュニティダンス

ダンス・エクスチェンジでは、その創始者であるリズ・ラーマンが考案したツールボックスと呼

ばれるダンスワークショップのための独自の方法論がある。カンパニーのメンバーはそれを共有しており、ワークショップの状況に応じてそれをうまく活用している。ここでは、**Encore**のプログラムで実際に用いられたエッセンスという手法を例に、高齢者を対象としたときの創造的なダンスのあり方を検証したい。

これは、他者の動きを観察し、その動きのエッセンスを抽出し、自分の動きとして再構成して表現するという手法である。他のダンス活動によくある振付の模倣と比較すると、誰もが創造的にダンスに参加できることをモットーとするコミュニティダンスの特徴が浮かび上がる。振付を他者と同じように踊ろうとして模倣する行為は、ある種のダンス経験者にとっては当たり前のことに思われるが、それに慣れない人々にとっては困難な作業であり、ダンスへの参加に消極的になることがある。しかし、エッセンスを用いれば、他者の動き(振付)を自分なりに解釈すること、それを再構成して表現することが「創造的」であるとして逆に評価されるため、参加者の自信と発見につながり、積極的な参加を促進できる。特に高齢者にとっては、動きを覚えること自体が困難であるため、効果的な手法の一つといえるのである。

4. 結び

Encoreのダンス部門は、参加者たちが創造的な自己に気づき、自信を得るとともに、徐々に社会の中で芸術活動を行う未来の自分を思い描くようになっていく姿が実に印象的なプログラムであった。コミュニティダンスの手法が高齢者に活用されたとき、自己肯定感と他者との新しい関係性の構築という点で、大きな社会的意義をもつと考えられる。こうした活動が、社会的意義のみならず芸術的な価値のあるものとして評価されるような社会に変化していくことが、高齢者をめぐる諸問題を解決するさらなる糸口となるであろう。

(付記) 本研究の一部は、平成25年度科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究による助成を受けている。また、アメリカでの現地調査にご協力いただいた、シューラ・ストラスフェルド、ジーン・ケリー、そして、**Encore creativity for older adults**の関係者の方々に対し、謝辞を呈する。

ダンス・ワークショップにおける
ファシリテーターの役割に関する研究
—5つの事例を対象に—

河合史菜（筑波大学大学院）
村田芳子（筑波大学）

1. はじめに

ダンス・ワークショップ（以下DWS）は、主体性や相互の学び合いを特徴として「参加体験型グループ学習」と捉えられ、近年、学校や福祉・地域のコミュニティなど様々な場で展開され、人々がダンスに触れる新しい形態として注目を集めている。しかし、「その実態は様々であり、ワークショップという名称を使っているにもかかわらず、本質から外れているようなものもある」と増山(2003)が指摘するように、進行する立場にあるファシリテーター(以下FT)によってその内容・方法は多岐にわたっている。そこで本研究では、DWSにおけるFTに着目し、5つの事例を対象に、参与観察及びインタビュー調査を通して、DWSのプログラム内容と展開におけるFTの関わり方を中心にその役割を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

1) 調査対象・期間

国内外で実績を上げ、社会的評価の高いFT5名を対象として選出し、実施するDWSへの参与観察及びインタビューを行った。以下各FTの概要と調査期間、WS参加者について示す。

表1 各ファシリテーターの特徴・調査期間

対象者	特徴	観察期間	参加者	インタビュー期間
鞍掛綾子(日本)	誰にでも参加できる動きのメソッド、「GAGA」を日本で最初に展開した。	2013/6/15・16	18歳以上 全て	7月
山田うん(日本)	子ども、市民、高齢者、障がい者など様々な対象に向けたWSを多数行っている。	2013/6/6・8	小学生	7月
		2013/7/13	指定なし	
北村成美(日本)	子ども、市民、高齢者、障がい者など様々な対象に向けたWSを多数行っている。	2013/8/17~23 2013/8/30~9/1	小学生	8月
		2013/9/7	指定なし	9月
ウォルフガング・シュタンゲ(イギリス)	障害者と健常者のWSを中心に、イギリスを基盤として世界で活躍している。	2013/7/26・27 2013/8/3・4	指定なし	7月
アダム・ベンジャミン(イギリス)	障害者と健常者のWSを中心に、イギリスを基盤として世界で活躍している。	2013/7/5・6	指定なし	7月

分析内容・方法

事例は、VTR撮影(鞍掛の事例を除く)と参与観察から、「プログラム内容」「プログラム構成」「提示の仕方」「言葉かけ」を中心に記録を作成した。インタビューは活動に対する意図と自身の役割に対する考えを中心に半構造化インタビューを行い、内容ごとに分析を行った。そこからプログラム内容とFTの関係、役割に関する考え方との関連について考察を行う。

3. 結果と考察

表2 DWSの展開例(アダム・ベンジャミン)

内容(2013年7月5日18:30~21:30)	
1	自己紹介
2	目が合った人と握手をする 手を握り、握り返す 手を感じて自由に踊る
3	目を閉じて手を握り、握り返す 目を閉じて手を感じて踊る (その他の部分でも踊りだす)
4	見せ合い①(終わりをを見つける) 見せ合い②(終わりをみつける)
5	押された分だけ歩く① 押された分だけ歩く② (壁を使って戻ってくる)
6	好きな空間へ身体を置き、戻る 好きなタイミングで出ていき自由即興 好きなタイミングで出ていき自由即興(2回目)
7	歩いて出会った人と握手・ハグする

1) プログラム内容とFTの関わり

FTが実施するDWSの内容として、表2の「目を閉じて手を感じて踊る」や「押された分だけ歩く」のように、5事例中3事例において、参加者自身の身体感覚や動きに目を向けさせるような内容が多いことが特徴的であった。また、内容提示の際、FTは他者や物を通して自身に目を向けさせるきっかけをつくっていた。

2) プログラム構成とFTの関わり

DWSのプログラム構成では、5事例中4事例に共通して、①参加者同士の関係を作る場面②動きへの導入③動きを引き出し体験する場面④参加者が主体的に動きの創出を行う場面・自由に動く中で少し発展的になる場面⑤まとめ、の場面がみられた。ただし北村の事例に関しては、形のある動きの中で参加者が主体的に動く場面が多くみられた。5事例中多くは①~⑤の順で展開されたが、同時に、または単発的に行われることもあった。

3) FTによる提示の仕方と言葉かけの特徴

5事例中3事例の特徴として、FTは、示範により動きを提示した後、観察やリードを通して必要に応じて言葉かけをしていることが挙げられた。また北村は「洗顔」「食事」等日常のシーンを取り入れるなど、状況設定を利用して参加者の動きを引き出し、鞍掛は言葉と示範を行い続けることを特徴としている。インタビューより、5人のFTは各参加者の主体性を重視し、参加者が自身に目を向ける為のきっかけ役の様に捉えており、これらの考えが前述した3項目の背景にあると考えられた。

3. まとめ

DWSにおけるFTは、他者や物・言葉・状況設定等を通して、自身の身体感覚や動きを意識させ、参加者自らが動き出してしまうような場を設定し、必要に応じて言葉かけや示範を行うことが分かった。こうしたFTの役割を具体的に知ることは、今後のダンス指導のてがかりとなるのではないだろうか。

北九州芸術劇場におけるダンスのアウトリーチ ～「地域のアートレパトリー創造事業・社ダンス」を事例に～

北九州芸術劇場 舞台事業課
村松 薫

1. はじめに

今年で10周年を迎えた北九州芸術劇場では、開館以来、継続してダンスのアウトリーチ事業を行っている。これまでに様々な形態のアウトリーチを実施してきたが、10年間継続して“種蒔き”を行った結果として、の各団体からの確かな手応えを感じているとともに、劇場の認知度も徐々に向上している。

そして現在は、劇場の次の10年間に向けて改めてアウトリーチ事業のあり方を見直しながら、事業を再構築する段階にあるとの考えから、新たなアウトリーチの事業設計を進めている。劇場が地域の文化拠点として果たすべきミッションを念頭に置き、戦略的にダンスのアウトリーチ事業を組み立てて取り組んでいる。

本発表では、現在、当劇場が考えるダンスのアウトリーチ事業のあり方を明らかにした上で、近年実施している事業「地域のアートレパトリー創造事業・社ダンス」を事例にその目的と実施方法を紹介し、ダンスによるアウトリーチの可能性について考えたい。

2. 北九州芸術劇場におけるダンスアウトリーチ事業の組み立て

当劇場ではこれまで、演劇・ダンスのアウトリーチ事業「アーティスト往来プログラム」を数年に渡って実施してきた（現在も継続中）。この事業では、アーティストの派遣を希望する団体を公募し、団体側のニーズに合ったアーティストを劇場がコーディネートしてアウトリーチを行っている。

しかし、財団法人地域創造が発行した『新「アウトリーチのすすめ」』¹でも明言されているように、アウトリーチは教育、福祉、まちづくりなど文化以外の政策領域にも有効であることが調査研究により明らかとなり、これらの意義と有効性を理解した上で行政施策の中に位置づけていくことが重要だとされている。そこで、当劇場では近年、文化以外の政策領域におけるアウトリーチ事業を意識的に組み立てて実施している。

3. 事例紹介

■まちづくりとしてのアウトリーチ 「地域のアートレパトリー創造事業」

かつては製鉄で栄えたものづくりのまち・北九州市は、現在も多くの企業が本社を構えているところが特色の一つである。このまちの特色に着目し、ダンスの力で職環境をより良いものにするを目的とした事業が「地域のアートレパトリー創造事業・社ダンス」である。

この事業では、北九州市の企業や団体等と国内外の第一線で活躍しているアーティストが協働し、地域のアートレパトリーとなりうる作品を創作する。劇場は協働する企業団体とともに、継続的な上演等に耐えうる作品づくりを行うと同時に、作品を通じた継続的な地域の活性化や地域課題の解決等を模索するというものである。

平成24年度は、安川電機と振付家・伊藤キムによるダンスプロジェクトを実施。会社のマスコットとなっているロボット「やすかわくん」のテーマソングに伊藤が振り付け、社員が踊るというワークショップを実施した。

平成25年度は、当劇場の入っている複合施設「リバーウォーク北九州」と振付家・近藤良平がオリジナルダンス「リバダン」を製作。リバーウォーク北九州内で働く従業員がダンスを習得し、夏祭りの企業パレードやフラッシュモブで披露するほか、週1回の朝練を設けてともに汗を流した。普段はあまり顔を合わせない人ともダンスを通じて気楽に触れ合うことで、社内コミュニケーションの活性化を促す結果となった。また、劇場では財団内の衛生委員会が健康のためにこの朝練への参加を推進し、職員の健康促進にも繋がった。

4. まとめ、今後の展望

本発表で紹介した事例「リバダン」では、ダンスによる従業員間でのコミュニケーションの活性化や健康促進といった成果に留まらず、“時にダンスをしながら楽しそうに働いている人たちがいる会社”というイメージを発信することで企業PRに繋がるという側面もあった。企業の多い工業地帯としての地域特性と、人口減少という地域課題に対して、この事業を通じて“働きたくなる”まちづくりが出来るのではないかと考える。今年度の「リバダン」を1つの事業モデルとして、来年度以降も市内の様々な企業にアプローチし、北九州ならではのダンスアウトリーチプログラムを築いていきたい。

¹ 『文化・芸術による地域政策に関する調査研究報告書 新「アウトリーチのすすめ」』、財団法人地域創造、2010年、p.6～10

宮城県における公共ホール主催による舞踊家のアウトリーチの実施例

～ストリートダンサーによる学校での授業例を中心に
中村なおみ(東海大学)・篠田明音(茨城大学)
山梨雅恵(仙台大学)・田巻以津香(東海大学)

1. 目的

新学習指導要領では、中学1・2年生において「武道」「ダンス」を含むすべての領域を男女ともに必修とする改訂が示され、平成 24 年度から完全実施となり、必修の取組みはすでに現場では歩を進めている。しかし、現場の教員にとっては教材研究・指導法研究が十分に行えていないといった課題が残されている。

さらに、昨今はダンスの内容について誤った解釈の報道がなされるなどの混乱も見られる。テレビのニュースで扱われ始めた当初、「学校教育にダンスが入る」という論調であったり、「ダンス必修化」という言葉を用いても「ダンス」=「ヒップホップ」「ストリートダンス」という誤った認識を助長するような報道が繰り返されている。

本研究者は、ダンスの学習内容と指導方法、評価基準の明確化、指導力養成が緊急課題であると考え、全国ダンス表現運動授業研究会にて多数の授業者と共に実践を重ねる研究を継続してきた。また、2005 年から宮城県における公共ホールが主催し、公演・ワークショップ・アウトリーチという形でダンスプログラムの実施に立会う機会を得て、特に学校教育での指導場面を中心として、学校での授業づくりの手がかりを探ってきた。

現在体育授業においては、技能の習得学習ではなく、探求的な学習を仕組む授業づくりが求められている。ダンス領域は、まさに動きの探究であり、個々が自由な表現を模索し、相互の違いを味わう学習であることが他領域にはない特性である。現代的リズムのダンスにおいて

本研究では、1) 舞踊家によるアウトリーチの実施と教育現場の反応について、2) ストリート系ダンスのダンサーの授業における教師行動について、を明らかにし、動きを介して子どもたちと踊る楽しみを共有しあう指導のあり方を探ることを目的としている。

2. 方法

- 1) 宮城県における公共ホールが実施した舞踊家によるアウトリーチの実施例をまとめ、実践内容を整理し、教育現場の反応について取材する。…担当者へのインタビュー及び資料・記録の収集
- 2) ストリートダンサーの学校での指導を授業分析の手法を用いて分析し、児童・生徒の感想を分類する。…授業映像の分析、生徒・参観教員へのアンケート調査

3. 結果

- 1) えずこホールが行ったダンスプログラムは表の通りであった。多数のアーティストの協力を得て、実施されている。

年目	公演	アーティスト
1 年目 2005 年度	公演	珍しいキノコ舞踊団
	ワークショップ	笠井瑞文、山田うん、伊藤千枝、矢内原美邦
	アウトリーチ	山田うん、伊藤千枝
2 年目 2006 年度	公演	山海塾、 室伏鴻ソロ
	ワークショップ	蟬丸、黒沢美香、室伏鴻、矢内原美邦
	アウトリーチ	黒沢美香、室伏鴻
3 年目 2007 年度	公演	えずこダンスクロッシング(康本雅子、ポクデス、KATHY、Off Nibroll)
	ワークショップ	井手茂太、山田うん、ISOPP
	アウトリーチ…	山田うん
4 年目 2008 年度	公演	踊りに行くぞ!!(LUDENS、北村成美、鈴木清貴×藤田拓也、地元 WS 参加者)
	ワークショップ	北村成美、OHASHI
	アウトリーチ…	山田うん、北村成美、ISOPP
5 年目 2009 年度	公演	珍しいキノコ舞踊団
	ワークショップ	山田うん、ISOPP
	アウトリーチ	山田うん、ISOPP
6 年目 2010 年度	公演	開催なし
	ワークショップ	山田うん、ISOPP
	アウトリーチ	山田うん、ISOPP
7 年目 2011 年度	公演	Co.山田うん
	ワークショップ	山田うん、ISOPP、楠原竜也
	アウトリーチ	山田うん、ISOPP、楠原竜也
8 年目 2012 年度	公演	楠原竜也 ISOPP(ジャズユニット:フライドプライドのゲスト出演として)
	ワークショップ	楠原竜也、青木尚哉、ISOPP
	アウトリーチ	楠原竜也、青木尚哉、ISOPP
9 年目 2013 年度	公演	ISOPP
	ワークショップ	青木尚哉、ISOPP
	アウトリーチ	青木尚哉、ISOPP

2) ストリートダンサーの学校での授業については、
2008年 小学校2校・高校ダンス部2校
2009年 小学校4校
2010年 小学校4校
2011年 小学校4校
2012年 小学校7校
2013年 小学校7校
実施数23校、30回、述べ参加者数1242人に対して行われた。実施された小学校での授業事例における児童への調査では、楽しさや興味関心の高さが示された。授業の分析では「これできる?」という問いを投げかけ、「練習」ではなく「子どもがやってみたくなる雰囲気」を作る。「これはどう?」「これもやってみる?」と次々とテンポよく運動学習が行われ、見せ合って楽しむまとめであった。指導言語に否定的な言葉はない・「教える」より相互作用(運動を通したやりとり)を楽しむ・完成形を求めない・子どもの気持ちを受け止めながら柔軟に対応するなどが特徴的であった。